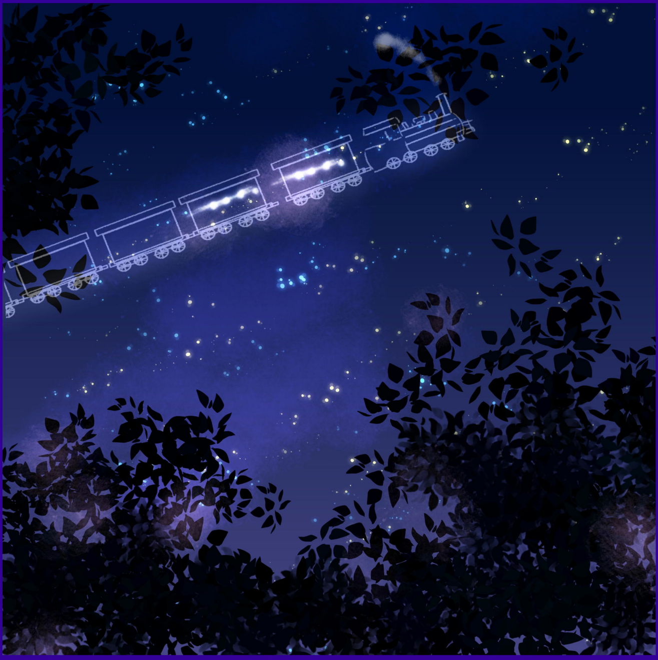
『銀河鉄道の夜』をめぐって

高野敦志



目次

はしがき

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を読んだのは、まだ二十代の頃だったのか。遺稿だったこの作品に、四種類の原稿があるのを知ったのは、ますむらひろし氏が漫画化した同作品を読んでからだった。ここでは、『銀河鉄道の夜』と関わりのあるものを、いくつか紹介することにした。

なお、登場人物の「カムパネルラ」は、現代仮名遣いの表記で「カンパルネラ」と記されることがある。賢治の原稿の中でも揺れているという。ここでは「カムパネルラ」に統一することにした。

二〇二四年七月二一日

高野敦志

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』

宮沢賢治は大正十一年二十七歳の時に、女学校の教師をしていた二歳年下の妹トシを亡くしている。詩集『春と修羅しゅら』に収録された「永訣えいけつの朝」「松の針」「無声慟哭どうこく」などに、その心情が吐露とろされている。

大正十二年八月、賢治は北海道と南樺太を旅する。亡き妹トシの魂が白い鳥となって、北方に旅立ったという思いから、トシの面影を求めての旅になった。稚内わっかないから大泊おおどまり（コルサコフ）に渡り、樺太の大地を鉄道で北上する。豊原（ユジノサハリンスク）を経て栄浜（スタロドゥプスコエ）に出て、『銀河鉄道の夜』の構想を得たとされる。

代表作『銀河鉄道の夜』の中で、ジョバンニが親友カムパネルラへの思いを抱いて、町の夜景を眺めていると、汽車の音が聞こえて、明かりのともった車窓の中で、旅人が楽しそうにしているのが見える。そこから原稿の欠落があり、いつの間にか、ジョバンニはその列車の中に、カムパネルラとともに乗り込んでいた。

宇宙を走る銀河鉄道からは、星空に林や野原が二重写しになった幻影が見える。この世に別れを告げるときに、懐かしい思い出を夜空に投影するかのように。「あそこがほんとうの天上なんだ。あっ、あそこにいるのはぼくのお母さんなんだよ」と語ったのを最後に、カムパネルラは車内から姿を消す。

目を覚ましたジョバンニは、カムパネルラが川に落ちた友人ザネリを助けるために、川に飛び込み、命を落としたことを知る。カンパネルラとの別れの中には、結核で死んだ妹トシへの思いが込められているのか。

「宮沢賢治　銀河への旅」

これはＮＨＫで製作されたドキュメンタリーを、ＤＶＤとして収録したものである。宮沢賢治の代表作『銀河鉄道の夜』は、少年ジョバンニが親友カムパネルラとともに、銀河系宇宙を汽車で旅する物語で、亡くなった愛する人を思う挽歌ばんかのような作品である。

妹トシが亡くなって、賢治はトシの魂を求めて、樺太への旅に出た。その途中で詩「青森挽歌」が生まれた。闇夜をゆく夜行列車のイメージが、『銀河鉄道の夜』の執筆につながったとされる。実は、賢治は妹トシ以外に、親友との別れを体験していた。。

賢治は盛岡高等農林で、保阪ほさか嘉か内ないという青年に出会った。実家が山梨県韮崎にらさきの地主だったこともあり、貴族でありながら土地を農民に解放したトルストイを敬愛していた。人間は百姓であるべきで、キリストやトルストイのような自己犠牲が重要だと主張していた。二十歳の頃の賢治は、保阪嘉内に強い影響を受けていた。

童話『風の又三郎』で、主人公又三郎が真っ赤な髪をしているのは、嘉内が書いた戯曲「人間のもだえ」で、嘉内自身の演じた全能の神の姿が、元になっているからだという。ハレー彗星すいせいが大きく夜空に尾を引いた光景を、嘉内は文章に残しているが、これも銀河鉄道のヒントになったとされる。嘉内が描いた電信柱の絵に刺激され、賢治自身も『月夜のでんしんばしら』を描いている。

『銀河鉄道の夜』で、死者の魂のほとんどが降りた後、二本の電信柱が見える所で、「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ」とジョバンニが言うと、カムパネルラの姿は消えてしまう。本当の天上の世界は、賢治が嘉内とともに過ごした頃を指しているらしい。

夢と希望を分かち合った賢治と嘉内だが、虚無思想と皇室への不敬を理由に、嘉内は退学を余儀なくされる。やがて、軍人となって上野の帝国図書館で、賢治と再会するのだが、その後二人は会うこ

とがなかった。
　強い影響を受けた友とは、賢治は心を通わせることができなくなっていた。この苦しみがジョバンニのカムパネルラとの別れとして、『銀河鉄道の夜』に描かれることになったというのだ。
　このドキュメンタリーを見終えて感じたのは、宮沢賢治が保阪嘉内に強い影響を受けていたこと、賢治に自己犠牲の尊さ、土と生きる道を叩き込んだのは、嘉内の方だったということだ。しかし、その精神を多くの詩と童話という形で世に残したのは賢治の方である。
　強烈な思想の持ち主も、青春が終わるとともに人並みの道を進むことが多い。強い影響を受けながらも、魂を言葉に注ぎ込むことを続けた者が、作品を世に残すことができるということだ。

アニメ『銀河鉄道の夜』について

一九八五年に公開されたアニメで、宮沢賢治の原作にほぼ忠実である。台詞もそのまま用いられているが、大きな変更点はジョバンニやカムパネルラなど、登場人物のほとんどが猫に変更されている点である。

これは漫画家のますむらひろし氏が、制作に関わっているからである。氏は『銀河鉄道の夜』の研究を長年されており、遺稿の同作品に関して、初期形、最終形、四次稿編というように、原作の異なる原稿に基づいて、繰り返し漫画化を試み、二〇二三年には成果を最大限に生かした四次稿編を完成している。

ますむら氏の足跡からすれば、このアニメは初期の研究に基づいて制作されており、四次稿編の緻密ちみつな表現と比べれば、それほど個性的であるとも思えない。昭和時代のアニメといったタッチで、メルヘンチックであるが、リアリティとファンタジーの両立を果たした四次稿編の素晴らしさからはほど遠い。ますむら氏は原案を提示したに過ぎず、アニメーションを直接制作したわけではないからだが。

ジョバンニは青い猫、カムパネルラは赤い猫である。服は上半身のみである。猫の表情の描写も類型的である。ますむら氏の四次稿編に感動した人間からすると、アニメとしては不満が残ってしまうのである。

大半の登場人物は猫に変更されているが、タイタニック号の沈没で犠牲となった家庭教師とただし、かおるは、なぜか人間のままである。猫の世界として描くなら、登場人物はすべて猫でなければ筋が通らない。

脚本は別役べつやく実みのる、音楽は細野ほその晴臣はるおみが担当しており、幻想的で美しい世界なのだが、ちょっと物寂しい感じがする。明るい部分と悲しい部分の減り張りが、もう少しあっても良かったのではないか。

カムパネルラが銀河鉄道から消えて、ジョバンニが目を覚ました

形にしたのは、原作の四次稿と同じである。ただ、ますむら氏の四次稿編では、黒い帽子の男が語る人類の歴史や、現実がかりそめに過ぎないといった、仏教的な思想が挿入されている。その一方で、ブルカニロ博士の催眠実験は削除されている。未完成の遺稿を、もし賢治が完成させていたら、こんな形になったであろうという想定で、ますむら氏の四次稿編は組まれているのである。

　猫の表情から切実な感情が伝わってくること、黒い帽子の男の話を挿入したことが、ますむら氏の四次稿編の特長であり、四次稿編をもとにした『銀河鉄道の夜』の再度のアニメ化を切に願うところである。

ますむらひろしの『銀河鉄道の夜　最終形』

これは宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の四種類の草稿のうち、最後に推敲したと見られる最終形をもとに、登場人物を猫にアレンジした漫画である。ますむら氏は、これに飽き足らず、『銀河鉄道の夜　四次稿編』を完成させている。

ますむら氏の『銀河鉄道の夜』に初めて触れたのは、『赤旗』日曜版の連載においてだった。これが現在刊行されている『銀河鉄道の夜　四次稿編』である。登場人物が猫になっている点では、『銀河鉄道の夜　最終形』と同じだが、本文の行間に漂っているものまで、絵で描写しようとしている点、画面が大きいおかげで、猫の表情に人間のような迫真性が感じられるとともに、言葉で表現されている以上のものを、絵で表そうとしている点など、渾身こんしんの大作であることは間違いない。それと同時に、白黒の画面の一部は、ますむら夫人によって美しく彩色を施されている。

四次稿編があまりにも素晴らしいので、最終形と比較すると、どうしても見劣りしてしまう部分が出てくる。四次稿編を見なければ、それほど気にならないかもしれないが。まず、最終形の絵は小さいので、四次稿編のように詳細な描写がされていない。猫の表情にしても、登場人物を猫にしたという感じで、四次稿編に見られるような、猫の人物化と言えるほどの、細やかな表情が描かれていない。彩色も口絵以外はされていない。そのため、宮沢賢治の文章に添えられた挿さし絵えという感じがする。四次稿編のような、絵だけでも自立しうる域にまで到達していないのである。

大きな変更点としては、銀河鉄道の車両が、最終形ではボックスシートなのに対し、四次稿編ではロングシートに変更されている点である。軽便けいべん鉄道のような小型の車両では、ロングシートしかあり得ないとの指摘を受けての変更だという。

ますむらひろしの『銀河鉄道の夜 初期形』

宮沢賢治の遺稿『銀河鉄道の夜』には、四種類の草稿があるという。現在では四次稿が賢治の意図した最終稿に近いものとされているが、僕が最初に読んだ角川文庫版（定本は筑摩書房版『宮沢賢治全集第十巻』）では、カムパネルラが列車から姿を消したあと、黒く大きな帽子をかぶった青白い顔のやせた大人と、ジョバンニは語り合うことになる。
「ああ、どうしてなんですか。ぼくはカムパネルラといっしょにまっすぐに行こうと言ったんです」
「ああ、そうだ。みんながそう考える。けれどもいっしょに行けない。そしてみんながカムパネルラだ。（中略）あらゆるひとのいちばんの幸福をさがし、みんなといっしょに早くそこに行くがいい、そこでばかりおまえはほんとうにカムパネルラといつまでもいっしょに行けるのだ」
僕が『銀河鉄道の夜』を初めて読んで、強い印象が残ったのはその部分なのである。それに続いて「いきなりジョバンニは自分というものが、じぶんの考えというものが、汽車やその学者や天の川や、みんないっしょにぽかっと光って、しいんとなくなって、ぽかっとともってまたなくなって、そしてその一つがぽかっとともると、あらゆる広い世界ががらんとひらけ、あらゆる歴史がそなわり、すっと消えると、もうがらんとした、ただもうそれっきりになってしまうのを見ました」という長文が来る。
賢治はここで、あらゆる存在は仮初かりそめであるという仏教思想を表現している。ますむら氏は最終形（四次稿）に基づいて『銀河鉄道の夜』を、まず漫画化したわけだが、すべての映像が幻と消える場面を表現したいがために、さらに初期形［ブルカニロ博士篇］の漫画化に踏み切ったのではないか。

ブルカニロ博士が現れ、それまでに見た映像は、すべて博士の実験によって、ジョバンニが見させられた夢だということが分かる。

ジョバンニが勇気付けられたところで、初期形［ブルカニロ博士篇］は終わり、カムパネルラが川で水死したかどうかは定かではない。

　四次稿では、カムパネルラがいなくなると、ジョバンニはすぐに目を覚ます。黒く大きな帽子をかぶった学者や、ブロカニロ博士も登場しない。その方が物語の構成としてはすっきりしており、読者に想像するための余地が残されている。

　ただ、四次稿で削除された部分は、多少理屈っぽくなるものの、『銀河鉄道の夜』を理解する上で重要な表現を含むので、角川文庫版では四次稿にその部分を挿入するという折衷せっちゅう案を採ったのだろう。ただ、折衷したために、ブロカニロ博士が現れて目を覚ましたという前提が崩れ、ブロカニロ博士と話したことまでが、夢の中の出来事になってしまっている。

　なお、ますむらひろしは初期形や最終形に飽き足らず、赤旗日曜版に『銀河鉄道の夜 四次稿編』の連載を始め、全四巻を完成させている。

　銀河鉄道に乗っていたカムパネルラが、突然ジョバンニの前から姿を消す。宮沢賢治の四次稿では、ジョバンニはすぐに目を覚まし、夢を見ていたことを悟る。黒く大きな帽子をかぶった学者や、ブルカニロ博士の描写は、削除されているのである。

　ますむら氏が四次稿に忠実にならって、その部分を省略するのか、筑摩書房版や角川文庫版のように、四次稿に黒い帽子の学者やブルカニロ博士を登場させて、初期形との折衷を図るかに注目していた。

　カムパネルラが「あっ、あそこにいるの、ぼくのお母さんだよ」と言い、ジョバンニが「僕たち一緒に行こうねえ」と呼びかけて振り返ると、ジョバンニの姿は列車の中から消えている。ジョバンニが悲しみのあまり「うああああ」と叫ぶと、列車の座席には黒い帽子の学者が座っていて「おまえはいったい何を泣いているの」と問いかける。

　やはり、ますむら氏は四次稿で削除された部分に、宮沢賢治の思

想のエッセンスが潜んでいると考え、あえて四次稿で削除された部分を、漫画で表現することにしたのである。カムパネルラが消えた後、すぐにジョバンニの夢が覚めてしまったのでは物足りないと、僕自身も思っていたので、ますむら氏の判断に敬意を表したい。

ますむらひろしの『銀河鉄道の夜　四次稿編』

赤旗日曜版に連載されていた漫画で、人間化された猫の顔がかわいらしかった。きちんと見ていなかったので、いつか本になったときに通して見たいと考えていた。

宮沢賢治の原作を読んだとき、主人公のジョバンニ、友達のカムパネルラが何者かと思った。名前からすると、イタリアを舞台にしているようだが。新聞の活字を拾う文選ぶんせんの仕事を、小学生のジョバンニがしているが、それは漢字の活字が膨大にあるからで、ヨーロッパなら古くからタイプライターがあったはずだ。教室で教師に起立して礼をするのも、日本の習慣であるから、描かれているのは折衷せっちゅう的な世界である。

イタリアの少年の話が、ますむらひろしの漫画では、猫の少年の話に変わっている。このアレンジが効いている。猫の顔は日本人とは違って、ダイレクトに感情を表すからだ。かわいらしさも、悲しげな表情も。ブルーを主調とする絵は抒情じょじょう的で、賢治の書いた一つの文が、ファンタジックな一場面に表現されている。

からかわれているジョバンニは、仲良しだったカムパネルラが自分から遠ざかり、いじめっ子らの仲間に混じっているのを知る。それが悲しくてならず、山の中で夜景を見ていると、遠くを汽車が走っている。眺めているうちに、自分が汽車に乗っていることに気づく。

なお、ますむらひろしによる同作品の漫画化は三回目であり、かつての漫画は『銀河鉄道の夜　最終形・初期形』の形で刊行されている。

第二巻目は銀河鉄道の旅が佳境かきょうに入る。この旅は天上の世界に旅立つカムパネルラを、ジョバンニの魂が追っていくのだという前提を理解していれば、より深い鑑賞が可能になる。「おっかさんはぼくを許して下さると思う」というカムパネルラの言葉は、親に先立つ不孝に対する思いなのだろう。なお、ジョバンニが「き

みのおっかさんはなんにもひどいことないじゃないの」と言っていることから、カムパネルラの母が健在のように見えるが、「あそこがほんとうの天上なんだ。あっ、あそこにいるのはぼくのお母さんなんだよ」と言っている点、カムパネルラが水死したことを悼いたんでいるのが父親だけである点でから、その時点でカムパネルラの母は亡くなっていると見た方が妥当だろう。

　それにしても、宮沢賢治の言葉は、散文詩のようであり、さりげなく書かれた言葉に多くの想いを込められているから、活字だけ追っている場合には、読み流してしまう恐れがある。

　鳥捕りが知らぬ間に、車両から河原に移動して鷺さぎを捕まえていると思ったら、次の瞬間には車両の中に戻っているのも、死後の世界だからこそ、時空を自由に移動できると思えば納得がいく。捕らえられた鳥が、押し絵のようにペチャンコで、食べてみるとチョコレートの味がしたり、水晶の中で火が燃えていたり、現実ではあり得ないことが起こるのだ。リアリティという枠を取り払って想像力をはばたかせた文章を絵画化することに、ますむら氏は創作意欲を掻かき立てる。

　島のいただきに白い十字架が立っていて、乗っている猫たちが、アーメンと祈りを捧げている。イタリアをモデルにしているから、キリスト教のイメージが多く現れる。現実の賢治は、熱心な法華経の信者だったから、描かれる西洋的な宗教観と、賢治自身の信仰がどのように折り合いをつけているかに感心を持っていた。

　車掌が現れて、カムパネルラは切符を出す。それは死後の世界への切符だったのだろう。ところが、ジョバンニは切符を持っていなかったので、折り畳まれた紙を車掌に手渡す。車掌は「これは三次空間の方からお持ちになったのですか」と問う。まだ現世にいるのに、天上世界へ向かう汽車に乗っているのかという驚きが込められている。そこには読むことができない文字が書かれていたのだが、ますむら氏は、自身の解釈で「南無妙法蓮華経　日蓮」という文字を描き出す。

　イタリアの二人の少年には、御題目の文字は読めなかったというわけだが、これさえあれば「どこへでも勝手にあるける通行券」だ

という言葉には、この世とあの世の行き来を可能にするほどの力を持つ、法華経に対する絶対的な信仰が、賢治にはあったのだと、ますむら氏は考えるのである。

　これは宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の四次稿をもとに、漫画化されているわけだが、必ずしも四次稿に忠実なわけではない。四次稿では削除されている場面でも、美しければ表現されているのだ。

　天の川は銀河系の星々を横から見た姿と言われているが、ここでは文字通りの川となっている。そこには海に住むはずのイルカがはね回っている。川イルカも存在するのだから、決しておかしいわけではないのだが、賢治は三次稿の段階で削除してしまった。ますむら氏はそれを絵で表現したというわけだ。

　この巻で最も目を引くのは、氷河と衝突して沈没したとされるタイタニック号の乗客が、突然銀河鉄道に乗り込んでくるという場面である。家庭教師の青年が、子どもたち二人を何とかして助けようとしたが、助けられずに、神の御み許もとに行くことを選んで、二人の子を抱きながら海中に飲まれる。気がつくと、天上世界に向かうこの列車に乗り込んでいたという設定である。船が沈む場面の悲惨な状況が、ますむら氏の絵で再現されている。

　カムパネルラは沈没した船に乗っていた女の子と親しくなる。二人が楽しげに話しているのを見て、ジョバンニはつまらなくなり、さびしさを抑えられなくなる。ススキがなびく川辺からは、青く光る天の川が美しい。美しいからこそ、ジョバンニのさびしさはいやまさる。あの世に去ろうとするカムパネルラとの別れを惜しんで、銀河鉄道に乗り込んだのに、その貴重な時間を一人で車窓から夜景を眺めていなければならないのだから。

　賢治の『銀河鉄道の夜』は、象徴的で色彩的な描写が書き連ねられていく。それが何を意味するかは、読者の解釈に任されている。想像力がよほど豊かで、場面を視覚化できなければ、文字だけで賢治が描いた場面を思い描くのは難しい。だからこそ、ますむら氏はこの作品を繰り返し漫画化してきたのだろう。登場人物を人間臭い表情の猫に変更したことと、彩色された漫画の美しさが特徴であ

る。この筆遣いと色遣いのまま、アニメ化されたら、どれだけ息を呑のむことだろう。

　宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』は、三次稿と四次稿の間に大きな違いがある。カムパネルラが車内から消えたあと、黒い帽子をかぶった人から、世界の歴史を説明され、この生そのものが幻であると諭さとされ、本当の幸せを求めるように促される。さらに、ブルカニロ博士が登場し、ジョバンニに催眠実験をしていたことが明らかになる。銀河鉄道での体験そのものが、催眠によってもたらされたことになっていたのだ。四次稿では、それらがすべて削除されている。
　ますむら氏によれば、賢治は催眠術の危険性に気づいて、四次稿ではブルカニロ博士を消したのだという。ただ、黒い帽子の男が語った言葉には、賢治の思想のエッセンスが込められている。物語の構成上から四次稿では削除されているが、漫画化するうえでは無視しがたいので、ブルカニロ博士の催眠実験を除いた上で、黒い帽子の男の場面を再現したのだろう。『銀河鉄道の夜』の理想的な姿を、賢治に成り代わって再構築したと言える。挿入された三次稿の部分を読み飛ばせば、四次稿のままの世界を体験できるので、読者に二通りの読み方を提示しているのだ。
　ますむら氏の『銀河鉄道の夜　四次稿編』は、第四巻をもって完結した。そこで、本書で扱われた他の場面について、賢治の思想との関わりを考察することにしよう。サウザンクロス、南十字星の見える所で、大部分の乗客は降りてしまう。キリスト教の天国があって、そこにはキリスト教の神、イエス・キリストの姿まで現れる。しかし、ジョバンニとカムパネルラは下りようとしない。本当の神さまはそこにはいないと考えたからだろう。それが何かは分からないとしても。
　本当の神さまというのは、賢治にとって何だったのか。『法華経』の「如来にょらい寿じゅ量りょう品ぼん」で説かれる「久遠くおん実じつ成じょう」の釈迦しゃか如来にょらいのことなのか。ただ、釈迦如来は真実を説く師であって、釈迦如来を崇拝すうはいし

ろというのは、皮相な解釈である。宇宙という精神の大きな営いとなみが、唯一の神とも言える存在で、その表れがかりそめの世界であり、幻に過ぎないのであるが、そこで生きることを離れて、真実に近づくことはできないというのが、賢治の信じた『法華経』や日蓮の教えなのだろう。

　石炭袋というのは、宇宙の中で星が全く見えないところで、巨大な黒い穴である。その穴でさえ、ジョバンニは怖くないと言う。そこはブラックホールのような物で、中に飲み込まれたら、すべては消滅してしまうのだろう。究極の悟りというものは、かりそめの幻から逃れて、空の世界に至ることなのだが、迷いの世界にいる人々を救わないうちは、悟りに至らないというのが、大乗仏教の菩薩ぼさつの境地である。

　カムパネルラは亡き母の幻を見て、銀河鉄道の車内から消える。幻にとらわれているという点で、輪りん廻ねの世界に舞い戻ってしまったのだろうか。子供のまま生を終えた人間は、真っ当な人生を送るために、もう一度生き直すように神さまから命じられるというのが、前世の記憶を持つ子供の証言として、海外のドキュメンタリーでは放送されている。

　物語が終わったあと、ジョバンニはどうなるのだろうか。カムパネルラと死別した悲しみを乗り越えて、人々が本当の幸せが得られるように、人生を歩んでいくことになるのだろう。

映画『銀河鉄道の父』について

これは門井かどい慶喜よしのぶの直木賞受賞作品を、成島なるしま出いずるが映画化したもの。原作にほぼ忠実に映像化している。父政まさ次じ郎ろうを役所やくしょ広こう司じ、賢治を菅田すだ将暉まさき、妹トシを森もり七菜ななが演じている。宮沢賢治の一生を、二時間余りの映画にまとめるのは、かなりの困難が伴うはずだが、それを父政次郎の視点から描くことで、家族との関わりを中心にエピソードを選んだ。

父政次郎は質屋しちやを営む旧家の主人だが、新しい時代に生きる者として、思い悩む息子と衝突しながらも、懐ふところ深ぶかい慈愛で見守り続ける。家業の質屋を弱い者いじめと言ったり、折角進学させてやった盛岡高等農林学校をやめると言い出したり、家の宗派である浄土真宗をののしって、日蓮宗に入信したり。豊かな商家に生まれた坊っちゃんの我が儘ままのようだが、人の役に立つ仕事をしたいという息子の真しん摯しな願いを、広い心で受け止めていく。

賢治に創作をするように勧めたのは、妹のトシだった。トシが結核で倒れたのを知り、童話「風の又三郎」を書いて、病床の妹に聞かせる。トシに読み聞かせたい一心で「月夜のでんしんばしら」などの物語を書き続ける。しかし、雪の降った朝、トシは息を引き取る。その悲しみが「永訣えいけつの朝」という詩として結晶する。

妹トシの死後、賢治に創作を続けるように勧めたのは、父政次郎だった。賢治が文士として生きることを、心から応援するようになっていた。創作を続けながら、農民に農業指導をする賢治だったが、トシと同じ結核に倒れる。何としても助けたいという政次郎の思いが、ひしひしと伝わってくる。

危篤きとくに陥おちいった賢治の枕元で、政次郎は賢治がメモ帳に書き留めた「雨ニモマケズ」を読み上げる。臨終りんじゅう正念しょうねんのための枕経まくらぎょうのように。賢治の死しだ二年後、『宮沢賢治全集』全三巻が上梓じょうしされた。「銀河鉄道の

夜」を読んだ政次郎は、夜行列車の夢を見る。その車中で賢治とトシに出会う。家族として生まれたことを、死後の魂同士で語り合っているかのようだ。